

なぜ自由遊びが大事なの？

初瀬基樹

学校教育は、先生から直接いろんなことを教えてもらうので「直接教育」と言い、子どもたち自身も「今は〇〇について勉強している」という意識をもって学ぶため「自覚的な学びの時期」とされています。それに対して、幼児教育は、“遊び”を通して周りの環境から様々なことを学び、身につけていく時期なので「間接教育」と言い、「学びの芽生えの時期（無自覚的な学び）」とされています。幼稚園、保育園、認定こども園の保育・教育の指針となる「幼稚園教育要領」や「保育所保育指針」、「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」等には、共通して、教育及び保育の基本は「環境を通して行う」とされています。

とはいえ、園によってさまざまな保育形態があります。小学校以降の教育方法をそのまま取り入れたような早期教育を中心とした大人主導の一斉保育型の保育を行う園もあれば、当園のように、子ども中心の保育で自由遊びの時間が長い保育（「自由保育」としてしまうと「放任保育」と混同されてしまうことがあるため、あえてこのような書き方をしています）を行う園もあります。少しでも早い時期から、学校のようにしっかり教えた方が学力や運動能力も伸びるんじゃないの？と思われる方もいらっしゃると思いますが、実際はそうではありません。

子ども中心の保育で自由遊びの時間が長い幼稚園、保育所の子どもの方が、系統的な文字学習に取り組む「一斉保育」の幼稚園に比べて、「書く力」や「語彙力」が高い。

（内田伸子・浜野隆 『世界の子育て格差—子どもの貧困は越えられるか』 金子書房、2012年）

「運動指導を行なっている園と運動指導を行っていない園を比較したところ、運動能力が高かったのは運動指導を行っていない園の方だった」また、「一斉保育中心の園より自由遊びを多く取り入れている園の方が運動能力が高い」

（杉原隆・河邊貴子（編著） 『幼児期における運動発達と運動遊びの指導』 ミネルヴァ書房、2014年）

さて、なぜこのように一斉保育よりも自由遊びの時間を多く取り入れている保育の方が様々な能力が伸びるのかについて考えてみましょう。

イメージ

統括型（いわゆる一斉保育の場合）

たとえば、先生から「お芋の絵を水彩画で描きましょう」と言われた時、子どもの脳からニューロンが外に伸びて、「芋」や「これまで習った水彩画の手法」などといった情報に接続されて、自分の脳の中に情報が取り込まれ、自分の持っている情報やスキルと統合されて、「芋の絵」として出力されます。これはこれで有効な面もあります。

自己決定型（いわゆる自由保育の場合）

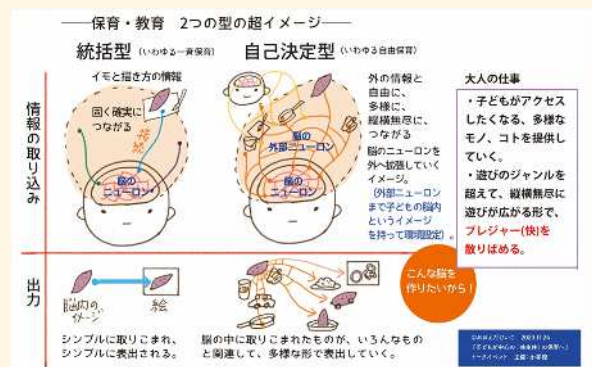
脳内のニューロンが、脳の外の情報と自由に、多様に、縦横無尽につながっていく、脳のニューロンを外へどんどん拡張していき、外部ニューロンまで子どもの脳内に・・・というイメージです。そうした場合、お芋だけでなく、たとえば、ピーマンやフライパン、絵の具などなど、ありとあらゆるものに外部ニューロンが接続され、さらにそれぞれの情報を組み合わせて、さまざまな表現となって出力されるようになるわけです。言われたことを言われたようにするだけでなく、さまざまな情報をもとに自分でいろんなものを組み合わせて斬新な発想でいろんなものを生み出すことができるかもしれないのです。

乳幼児期に自由遊びの重要性が求められるのは、このような自己決定型の脳をつかっていきたいからなのです。

※ ニューロン(神経細胞)

脳は 1000 億ものニューロン(神経細胞)からなる巨大なシステムです。

ニューロン同士はシナプス(接合部)によって網の目のように縦横無尽につながっていきます。



引用： 監／大豆生田啓友 著／おおえだけいこ『子どもが中心の「共主体」の保育へ』小学館

（ & 2023.11.24 おおえだけいこ オンライントークイベント 主催：小学館）